

日本社会病理学会
第38回大会
プログラム

開催校：北陸学院大学

2022年11月5日(土)～6日(日)

日本社会病理学会第 38 回大会プログラム

開催校	北陸学院大学
会期	2022年11月5日(土)～6日(日)
会場	北陸学院大学
現理事会	11月5日(土) 10:00～11:00
新理事会	11月5日(日) 11:00～12:00
総会	11月5日(土) 17:50～18:40
参加費	【会員】 一般：2,000円 大学院生：1,000円 【非会員】 一般・大学院生：2,000円 学部生：無料

***参加費は事前支払のみとする** (当日払は不可) **詳細は 27 頁**

*懇親会は実施しない

大会日程

第1日目 11月5日(土)

10:00～11:00	現理事会 (第23教室)
11:00～12:00	新理事会 (第23教室)
12:30～	受付開始 (1階)
13:00～13:10	開会式 (第25教室)
13:10～15:10	ラウンドテーブル (第25教室)
15:20～17:40	書評セッション (第25教室)
17:50～18:40	総会 (第25教室)

第2日目 11月6日(日)

10:00～12:30	自由報告部会 I・II (第25教室・第34教室)
13:15～16:00	シンポジウム (第25教室)
16:00～16:10	閉会式 (第25教室)

会員控室 (第1・2日) 第24教室

開催校連絡先 北陸学院大学 竹中祐二 研究室
電話 (代) 電子メール (オンラインでは非公開)

日本社会病理学会員のみなさま

第38回大会（北陸学院大学大会）

今期理事会・研究委員会は2022年度北陸学院大学大会をもって任期満了となります。神戸学院大学大会（2020年度）、立命館大学大会（2021年度）はオンラインでした。無料としたこともあり、いままでにはない参加者数（それぞれ200名程度）があり、層も多様でした。社会病理学研究への潜在的な関心を感じることができました。社会病理学的なテーマの立て方次第で、まだまだ学会を盛り上げていくことは可能だと実感した次第です。

今回の大会は、最初で最後の対面での大会となります。研究委員会ではシンポジウム、ラウンドテーブル、書評セッション、自由報告部会を企画しています。今大会は、2022年1月の大会から同じ年の開催となります。この3年間、コロナ禍における大会だったので、すべてが初めての経験となりました。心配でしたがなんとか企画を練り上げることができました。オンライン大会も首尾よく開催することができました。今回の大会での自由報告は会員10名から応募がありました。ひとつはテーマを設定した部会となります。理事会・研究委員会では安堵しております。対面の大会でもあり、それぞれのセッションにおいて旺盛な議論が期待されます。金沢でみなさんと顔を合わせるのが楽しみです。2023年度の大会からはなんとか通例の秋口開催にもどしていくことを期待しております。

本要旨集には、ラウンドテーブル、書評セッション、シンポジウム、自由報告部会の要旨、会場案内を掲載しております。

研究委員会

*** 会場案内は頁に記載されています。参加費の事前支払い方法、会場設備については27頁に記載されていますので、大会に参加される方は必ずお読みください。**

第1日目 11月5日 (土)

I. 開会式 13:00～13:10 (第25号室)

II. ラウンドテーブル 13:10～15:10 (第25号室)

「最悪の社会問題・社会病理」としての戦争

進行 相良翔 (埼玉県立大学)

1. 戦死・戦没者の死の検証と「生命の格差」 麦倉哲 (岩手大学)

2. 空襲の体験を読み解く ―戦争被害の「日常」化・「一般」化に着目して
木村豊 (大正大学)

3. 自衛隊体験についての考察

——体験の整理と細分化による自衛隊研究の展望——

津田壮章 (京都大学大学院)

III. 書評セッション 15:20～17:40 (第25号室)

日本社会病理学会監修『社会病理学の足跡と再構成』を読み広げる

進行 朝田佳尚 (京都府立大学)

執筆者報告

1. 田中智仁 (仙台大学)

2. 竹中祐二 (北陸学院大学)

評者報告

1. 西井開 (千葉大学社会科学研究院 PD)

2. 堀内翔平 (京都大学大学院)

3. 桂悠介 (大阪大学大学院)

4. 金本佑太 (神戸学院大学)

IV. 総会 17:50～18:40 (第25号室)

第2日目 11月6日(日)

I. 自由報告部会 I 10:00~12:30 (第25号室)

司会 金子雅彦 (防衛医科大学校)

1. 重大事件を惹起した年少少年への「保護処分必要性」と「保護処分『許容性』」の関係についての一考察 —「マークイズ福岡殺人事件」刑事公判における情状鑑定結果の取扱いを中心として— 服部達也 (京都産業大学)
2. 教師の性犯罪・性暴力等による懲戒事案の推移と傾向 吉田浩一 (星槎大学大学院教育学研究科)
3. 矯正施設を出所した人びとの帰住先にかんする一考察 —統計資料をもとに— 竹松未結希 (立命館大学大学院)
4. 精神障害者が受領するソーシャル・サポート類型の定量的検討 堀兼大朗 (滋賀大学)
5. 戦争の社会病理 —子どもが犠牲となること— 麦倉 哲 (岩手大学)
6. 自己和解を中心にしたリカバリー概念の生成に向けて —他者定義による「回復」を超えて— 市川岳仁 (立命館大学院/三重ダルク)

II. 自由報告部会 II 10:00~12:30

「男性性ジェンダーと社会関係」をテーマにして (第34号室)

司会 中森弘樹 (立教大学)

1. 仲間入り方略に着目した男女別集合の様相 —保育園3歳児クラスのビジュアル・エスノグラフィー調査— 天野 諭 (立命館大学院)
2. 若年男性の〈自己孤立化〉にかんする研究 西井開 (千葉大学社会科学研究院日本学術振興会特別研究員 (PD))
3. 「ひきこもり」のナラティブにみるホモソーシャルな関係 —引きこもった男性当事者の語りにみる生きづらさと共同性— 伊藤康貴 (長崎県立大学)
4. 中年独身男性の社会的孤立 —シェア居住経験者へのインタビューから— 堀内翔平 (京都大学大学院)

《昼休み 12:30~13:15》

Ⅲ. シンポジウム 13:15～16:00 (第 25 号室)

現代家族研究の争点と社会病理学—家族を透視する—

企画・進行 中村 正 (立命館大学)

1. 受刑者の語りから考える社会復帰と家族

下郷大輔 (作新学院大学)

2. 迷宮を生きる自己と脱家族—加害者家族研究をもとに

宮崎 (高橋) 康史 (日本福祉大学)

3. 政策における家族主義

藤間公太 (国立社会保障・人口問題研究所)

指定討論者

三浦恵子 (法務省東京保護観察所)

岡邊健 (京都大学)

Ⅳ 閉会式 16:30～16:40 (第 25 号室)

自由報告部会報告者のみなさまへのお願い

1. 日本社会病理学会第38回大会自由報告に関しまして、報告の際は下記の諸点にご注意ください。

(1) 割り当て時間

一人あたりの報告時間は、質疑応答を含めて、25分です。発表は20分以内にまとめてください。15分で一鈴、20分で二鈴、25分で三鈴とします。

(2) 大会当日のレジュメ等について

当日に配布するレジュメ・資料は、各自でご用意ください。学会事務局、大会開催校とも複写や印刷をお受けすることはしません。

2. 報告者は、報告される部会開始の10分前に教室にお集まりください。司会者・報告者による簡単な打ち合わせを行います。

3. すべての教室にはPC、マイク、プロジェクターなどが設置されております。PC利用者はUSBメモリ等の外部メモリを持参していただければ、Microsoft PowerPoint 2019やAdobe Acrobat Readerをご利用いただくことができます。機器を持ち込まれる場合には、HDMI端子に対応しているものを各自でご用意ください。

*大会校の設備については27頁に詳細な記載があります。

*ご不明な点は、研究委員会まで電子メールでお尋ねください。

連絡先：中村正 tnt01882@hs.ritsumei.ac.jp

第1日 11月5日（土）

■ラウンドテーブル（13:10～15:10）

「最悪の社会問題・社会病理」としての戦争

日本社会病理学会理事会声明として 2022 年 3 月 11 日付で以下のコメントを出した。

この度のロシアによるウクライナへの軍事的侵略によって、子どもを含む多数の民間人の命までも奪われています。また、多くの難民や家族の離散などが生じており、ウクライナ国民の大事な生活が破壊されています。このような武力による侵略行為は、平和を求める世界の人々に対する挑戦であり、最悪の社会問題・社会病理であり、絶対に許すことはできません。人間の命を奪い、国と家族を破壊している軍事的侵略を直ちに中止して、ロシア軍のウクライナからの撤退を強く要求します。

上記では、戦争などの武力による侵略行為は「最悪の社会問題・社会病理」と位置づけられている。では、この「最悪の社会問題・社会病理」に対して、社会病理学者としていかに向き合っていけばよいのだろうか。このラウンドテーブルでは戦争に関する研究を蓄積している方を話題提供者として迎え、戦争への向き合い方について参加者と共に考えていく機会を提供したい。

進行 相良翔（埼玉県立大学）

戦死・戦没者の死の検証と「生命の格差」

麦倉哲（岩手大学）

要旨

戦死・戦没者に焦点を当てるのは、こうした犠牲死者が戦争の中心的な当事者と言えるから。戦争による犠牲を無くすのも可能な限り減らすのも、学問が貢献できるかにかかっている。戦争研究において、社会学や社会病理学は存在価値を高めていく必要がある。戦争（政治）史や戦争責任論も大事だが、いまだ十分に明かされていない戦争犠牲者（犠牲死者や甚大な被害を受けた人）の実相について、多様な観点からマクロであれミクロであれ、解明し共有し検証を尽くす価値がある。戦後80年も間近な現在、社会学研究が勢いづいている。事実を発見し新たな光を当て、事実に基づいて多様な分析や総合が今後さらに期待されている。私は沖縄県渡嘉敷村に焦点を当て、戦災犠牲死者約600名の死の検証を続けている。「戦後が平和であるなら、自分が見たこと経験したことは語らなくてよいと考えた。話を聞く子孫もつらいから。」と口をつぐんできた80・90歳代の高齢者が口を開いた。

プロフィール

岩手大学嘱託教授。「格差・貧困」の視点でホームレス自立支援研究から東日本大震災被災者研究へと展開し、防災の視点から、自然災害や戦争災害における「死の検証」「生命の格差」研究を進めている。戦争に関しては、「戦争の社会病理3－渡嘉敷島で処刑された6名の伊江村民」（『岩手大学文化論叢』 Vol.11,2022）「戦争の社会病理－日本軍によって処刑された朝鮮人軍夫－」（『沖縄法政研究』 Vol.23,2021）「戦争の社会病理－日本兵によって処刑された沖縄県民－」（『岩手大学教育学部研究年報』 Vol.79, 2020）など

空襲の体験を読み解く－戦争被害の「日常」化・「一般」化に着目して

木村豊（大正大学）

要旨

第二次世界大戦末期、日本の主な都市では、米軍による空襲が激化し、人びとの生活空間を対象とした攻撃が日常的に行われるようになっていった。そしてそのような空襲は、戦後日本社会のなかで、「一般戦災」として位置づけられてきた。そこには、「日常」化・「一般」化した戦争被害を見ることができる。しかしながら、これまで戦争被害に関する多くの研究のなかでは、戦争の被害が特殊で非日常的なものとして位置づけられてきたため、戦争被害の「日常」化・「一般」化という側面については十分に論じられてこなかったように思われる。そこで本報告では、戦争被害の「日常」化・「一般」化という側面に注目しながら、報告者が東京大空襲の被災者に対して行ったインタビューの記録を読み直してみたい。それによって本報告では、戦争下の社会における「日常」とそのなかで引き起こされた「被害」について検討したい。

プロフィール

大正大学心理社会学部専任講師。東京大空襲などの戦争被害について記憶論の観点から研究を進めている。主要業績として、「空襲の死者を想起する場所－遺骨・モニュメント・写真」『戦争と社会 第5巻 変容する記憶と追悼』（岩波書店、2022年、共著）、「東京大空襲の集合的記憶と「戦後」の時間感覚－モニュメントにおける死者表象の変容に着目して」（『軍事史学』51巻2号、2015年、単著）がある。

自衛隊体験についての考察 ——体験の整理と細分化による自衛隊研究の展望——

津田壮章（京都大学大学院）

要旨

戦後日本の民軍関係（civil-military relations）において、自衛隊に生きる人々はどのような体験をしてきたのだろうか。自衛隊への入隊は、戦後日本社会でほぼ唯一の軍隊体験である。近年では毎年1万人程度の自衛官が退職しているにもかかわらず、その体験は2000年代に入るまで研究対象として等閑視されてきた。

本報告では、自衛隊体験に関する研究動向の整理と、現時点で研究に着手されていない自衛隊体験を整理・細分化することで、日本社会で脈々と体験されてきた固有の自衛隊体験といえるものを考察する。これまで自衛隊の何が研究対象となり、何が見落とされているのかを整理・細分化することは、今後の自衛隊を対象とした研究の展望を示すとともに、自衛隊という軍事組織に生きる人々を理解することにも繋がるものである。

プロフィール

京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員DC。主に自衛隊退職者に関する研究をおこなっている。主要業績として、「戦後日本の政軍関係と自衛隊出身政治家の消長——隊友会機関紙『隊友』の言説分析を中心に」（『戦争社会学研究 第5巻』みずき書林、2021年、147-169）、「自由な校風という教育実践——京都府立鴨沂高等学校の学校行事「仰げば尊し」から」（『人間・環境学』第29巻、2020年、135-151）等がある。

■書評セッション（15:20～17:40）

『社会病理学の足跡と再構成』を読み広げる

第31回大会以降、若手・中堅を中心としたテーマセッション・ラウンドテーブルを継続的に実施してきた。企画を貫く視点は「社会病理学をどのように展望するか」にあった。昨今の若手・中堅は、まだ十分に社会が問題として取り上げ切れていない、あるいは社会が問題として認識してすらいない論題に取り組んでいるのではないか。「新しい論題」は過去に社会病理学が検討してきた論題と異なるのだろうか。「新しい論題」に適切な分析手法や方法論的な立場はあるのだろうか。こうした視点から社会病理学を問い直す作業を進めてきた。

学会監修本として刊行された『社会病理学の足跡と再構成』にもこの視点は反映されている。執筆者には主に第31回、32回大会のテーマセッション・ラウンドテーブル報告者が名前を連ねているが、本書にはそれ以降の大会の成果も視野に入れたものとなっている。第1部では社会病理概念の負荷性を再考すること、第2部では「これから」を展望しながら「これまで」を整理すること、第3部は「これまで」をふまえながら「これから」を切り拓くことを目指した。それぞれの執筆者からは今後の社会病理学を展望するための重要な論点が示されている。

本企画ではこうした『社会病理学の足跡と再構成』を介して広がりのある議論を展開してみたい。評者には本書刊行以降に学会に関わるようになった若手会員に登壇いただくが、多様な会員の視点をぜひご提供いただきたい。

なお、当日は参加者間の議論に主軸を置くことを想定しているため、本書の紹介は最小限にとどめる。参加する会員には事前に本書に目を通していただきたい。

進行 朝田佳尚（京都府立大学）

・執筆者報告

田中智仁（仙台大学）

竹中祐二（北陸学院大学）

・評者報告

西井開（千葉大学社会科学研究院 PD）

立命館大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。現在千葉大学社会科学研究院特別研究員。臨床心理士。公認心理師。男性性と加害の問題について研究している。今回の報告では、報告者が主催し、かつフィールドワークの現場にもしている男性の語り合いグループ「ぼくらの非モテ研究会」を舞台に、現場の知を研究に結びつけ、またその成果を現場に還元する往還構造を、臨床社会学の視点から分析する。主著は

『「非モテ」からはじめる男性学』 集英社新書 2021年（単著）、『モテないけど生きてます 苦悩する男性たちの当事者研究』 青土社 2020年（共著）。

金本佑太（神戸学院大学）

神戸学院大学現代社会学部実習助手。現代社会における若者の生きづらさや社会的排除の実態、社会的包摂のあり方について、就労困難を経験した若者に着目し研究を進めている。主要業績として、『シリーズ生活構造の社会学② 社会の変容と暮らしの再生』（学文社、2022年、共著）、「新型コロナウイルス感染症拡大状況における若者就労支援の現状——地域若者サポートステーション事業の事例から」（『社会分析』49号、2022年、単著）、「若者就労支援における地域の関係機関との連携——地域若者サポートステーション事業の事例から」（『現代の社会病理』35号、2020年、単著）がある。

堀内翔平（京都大学大学院）

京都大学 人間・環境学研究科 博士課程。研究テーマは親密性、ジェンダー。現代社会において親密な関係を獲得することの困難さに焦点を当て、大学サークル内の恋愛トラブルや、シェア居住における親密性を研究対象としている。主たる業績（単著）に『『成立しない恋愛』の困難において集団が持つ意味——『サークルクラッシュ』経験の語りから』『現代の社会病理』第37号、2022年。

桂悠介（大阪大学大学院・非会員）

大阪大学大学院・人間科学研究科・博士課程。「イスラームをめぐる共生」をテーマに、不可視化された構造的問題を含む複雑な課題とその克服について論じてきた。今回の書評セッションでは、対象書籍の持つ、社会病理学会内部に留まらない対外的な可能性について検討する。主な論文は「創発的パラダイムとしての『共生学』の確立に向けて——共生の諸課題とメタ理論的視座の必要性——」（『共生学ジャーナル』2020年（単著）、「イスラームをめぐる共生：多元的アプローチのために」（『思想』岩波書店 2022年（単著）、「間文化的対話実践の可能性と課題——大阪におけるムスリムとノン・ムスリムの対話・交流事例から——」（『社会文化研究』2021年（単著）。

第2日 11月6日（日）

■自由報告部会Ⅰ（10:00～12:30）

司会 金子雅彦（防衛医科大学校）

1. 重大事件を惹起した年少少年への「保護処分必要性」と「保護処分『許容性』」
の関係についての一考察 —「マークイズ福岡殺人事件」刑事公判における
情状鑑定結果の取扱いを中心として— 服部達也（京都産業大学）
2. 教師の性犯罪・性暴力等による懲戒事案の推移と傾向
吉田浩一（星槎大学大学院教育学研究科）
3. 矯正施設を出所した人びとの帰住先にかんする一考察
——統計資料をもとに—— 竹松未結希（立命館大学大学院）
4. 精神障害者が受領するソーシャル・サポート類型の定量的検討
堀兼大朗（滋賀大学）
5. 戦争の社会病理 —子どもが犠牲となること
麦倉 哲（岩手大学）
6. 自己和解を中心にしたリカバリー概念の生成に向けて —他者定義による
「回復」を超えて 市川岳仁（立命館大学院/三重ダルク）

重大事件を惹起した年少少年への「保護処分必要性」と「保護処分『許容性』」の関係についての一考察—「マークイズ福岡殺人事件」刑事公判における情状鑑定結果の取扱いを中心として—

京都産業大学 服 部 達 也

現在の我が国の刑事政策の方向性として、2016年12月に成立、施行された「再犯防止推進法」やその後に策定された「再犯防止推進計画」の中で掲げられている基本理念の「誰一人取り残さない」社会の実現に向け、再犯防止のための取組の必要性を強く広報・啓発するなど、より広く国民の関心と理解を醸成する取組を促進することが求められている。

すなわち、過ちを犯した人間を社会から分断排除するのではなく、「誰一人取り残さない社会の実現—NO ONE LEFT BEHIND—（「再犯防止推進計画」の基本方針）」のためにどうすればよいかを一般市民も当事者として考えていかなければならなくなったということであり、立ち直り、社会復帰のために支援していくことこそが向かうべき方向性であることを明示しているといえる。

しかしながら、実際には生きづらさを抱えた少年や若年者に対して「自己責任論」に基づく不寛容や無理解、無関心を示す風潮が依然と強いのが社会の現状と認められるところである。

そして、2020年8月に福岡市内の大型商業施設において少年院を出院後、更生保護施設に帰住したばかりの年少少年（犯行当時15歳）が通り魔的に若い女性客を刺殺するという社会を震撼させ、耳目を引いた事件について、本年（2022年）7月25日に福岡地方裁判所（本件事件は裁判員裁判対象事件として審理されている。）において判決が出されている。

同裁判所は、弁護側が求めた少年法55条による事件の家庭裁判所への移送ではなく、当該年齢の少年に対する刑事処分としては最高刑の懲役10年以上15年以下の不定期刑を選択している。

本件刑事公判における情状鑑定では、「当該少年は、驚くほどの虐待を受けて生育してきた結果、共感性、罪悪感が欠如し、人格の統合が阻害されている。」「当該少年には組織的、計画的なトラウマへの心理療法、精神療法、すなわち『治療的養育』が必要」、「少年院で適切なケアがあったとは思えないから、もう一度少年院でやるべき矯正教育を行うべきであり、やるべき事はたくさんあるし、当該少年がケアを受け入れる余地はある。」との鑑定結果が示されており、判決理由の判示内容においても裁判所はこの鑑定内容自体を首肯していることが認められる。

しかしながら、本件判決では、「被告人が保護処分によって鑑定意見の指摘するような治療を受けることで、その成育歴による問題を改善し、更生する余地は残されている。しかし、一人の生命を奪うという取り返しのつかない結果を生じさせるとともに、社会も大きく動揺させた被告人が保護処分を受けることは社会的に許容し難い。（よって）被告人は保護処分相当性がないと認められる。被告人の考慮すべき事情を考慮するにも限界がある。家庭裁判所に移送することはできない。」との理由によって上記のとおり適用でき得る最大の刑事処分を選択の上、科している。

すなわち、裁判所は、当該少年の事件（非行）の発生要因としての生き辛さを科学的かつ丹念に立証した情状鑑定の内容を「十分に合理的で納得できるものといえる。」と「判決理由」中において明示して是認しながらも、その治療処遇のための「保護処分」を選択するには（「保護処分相当性」を認定するには）、「保護処分の必要性、可能性」が十分に存在するとしても、それに加えて「保護処分を選択することへの『社会の許容性』が存在することが必要要件となる」との考え方が示されていると考えられる。

そこで、本報告においては、本件情状鑑定内容を概観しながら、この「社会の許容性」とは何を意味するのかを考察していき、本件事案のような複合的な「生き辛さ」を抱えた少年たちへの立ち直り、社会復帰支援に対する一般般社会の正しい理解、共感支持がどうすれば醸成できるのであろうかという点の考察を試みることにしたい。

教師の性犯罪・性暴力等による懲戒事案の推移と傾向

吉田浩一（星槎大学大学院教育学研究科）

1. 研究の背景と目的

わいせつ教員が社会的に問題になっているが、教師の性犯罪・性暴力についての研究は少ない。先行研究として、須藤(2021)は「教師の性犯罪・性暴力」をも含めた「教師の不祥事」に関するイメージと教師への信頼の実態を調査している。榊原・森脇(2021)は、2018年度に朝日新聞の紙上に報じられた教師の「わいせつ行為等」の事案を朝日新聞記事データベース聞蔵Ⅱビジュアルで収集し、校種別の特徴を明らかにしている。後藤(2017)は、小学校～高等学校教師によるわいせつ行為をテーマとしたニュース記事を収集し、テキストマイニングを用いて分析することによって、様態の詳細を描き出すことを主目的とした研究を報告している。ただし、発覚要因等は明らかになっていない。本研究では、文部科学省「公立学校教職員の人事行政状況調査」2011年度から10年間の被処分者の推移を性別、年齢層、学校種、非違行為発生場面（時間）、非違行為発生場所、非違行為の態様、非違行為発覚の要因について、先行研究と関連させて、その傾向と特徴を明らかにした。

2. 本研究での検討結果

本研究では文部科学省の人事行政状況調査を分析した。結果は、次の通り。

表 教師の性犯罪・性暴力等に係る懲戒処分等の推移

	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年
懲戒処分	151	168	180	183	195	197	187	245	228	178
訓告等	19	19	25	22	29	29	23	37	45	22
計	170	187	205	205	224	226	210	282	273	200

(出典：文部科学省「公立学校教職員の人事行政状況調査」2011～2020年より筆者作成)

被処分者は、増加傾向が読み取れる。2020年の減少は、新型コロナウイルス感染防止の緊急事態宣言によるものと考えられる。被処分者の性別としては、男性がほぼ200人前後で推移している。2018年度は最多の276人である。被処分者男女比の平均は、約70：1である。男性教師が性犯罪・性暴力等を起こしやすい傾向が明らかである。被処分者の年齢層は、20代、30代、40代、50代以上の4層で、やや40代が少ないものの、各世代は、ほぼ同じ割合である。被処分者の所属校種は、中学校、高等学校の教職員が多い。懲戒処分の総数においては高等学校所属の教師が最も多い。性犯罪・性暴力等の被害者は、自校の生徒が最も多い。中学生と高校生を「生徒」としているため、どちらが多いかデータ上では判断できない。発生場面は、勤務時間外が最も多い。勤務時間中については「放課後」「授業中」「休み時間」「部活動」「学校行事」の順に発生している。発生場所は、「ホテル」「保健室・生徒指導室等」「自宅」などが多い。非違行為の態様としては、「体に触る」「盗撮・のぞき」「性交」「接吻」の順である。非違行為発覚の要因は、警察からの連絡「教職員への相談」の順である。被害者は自校の生徒が多いことを踏まえると児童生徒性暴力に対する学校での対策が喫緊の課題である。

矯正施設を出所した人びとの帰住先にかんする一考察 ——統計資料をもとに

竹松未結希（立命館大学大学院）

本報告の目的は、矯正施設を出所した人びとの帰住先にどのような質的な変化や特徴がみられるのかを、一次資料の分析を通じて考察することである。

データとして、法務省発刊『矯正統計年報』に記載の「出所受刑者の出所事由、入所度数及び出所時の保護別 帰住先」を用いた。本報告では、帰住先の具体的な統計データが掲載されるようになった、第 68 巻（1966 年）から第 123 巻（2021 年）までの年代を分析対象とした。

矯正施設を出所した人びとの帰住先としてカテゴライズされているのは、「①父母のもと ②配偶者のもと ③兄弟・姉妹のもと ④その他親族のもと ⑤知人のもと ⑥雇主のもと ⑦社会福祉施設 ⑧更生保護施設等 ⑨その他 ⑩①～⑨に含まれない自宅(2016～)」の 10 項目である。先に述べた、帰住先の質的な変化や特徴をみていくために、10 項目の各年代の実数の変化や割り出した構成比をもとに分析をすすめていく。

分析の結果、総合面では、どの年代も一貫して「①父母のもと」へ帰住する割合がもっとも高かった。1994 年頃までは「②配偶者のもと」が 2 番目に高く、「③更生保護施設等」が 3 番目に高い結果となった。2000 年代以降になると、「④その他」の割合が上位に位置するようになった。

また、男性と女性それぞれの帰住先にも着目した。男性の帰住先の場合、出所した人びとの総数の大部分を占めるといった実情から、総合面から示された結果とおおむね一致していた。家族や知人などの親族・知人関係にある人を帰住先とする割合は、時代を経るごとに徐々に減少していつている特徴がみられた。

女性の帰住先の場合、総合面・男性と同様に、どの時代も一貫して「①父母のもと」「②配偶者のもと」「③更生保護施設等」へ帰住する割合が高かった。また、各帰住先の割合の変動が多く、年度によって、各帰住先の割合を逆転する様子が見られた。出所した女性の約 7 割は、どの時代においても、家族や知人などの親族・知人関係にある人を帰住先としている特徴がみられた。

以上から、矯正施設を出所した人びとの、選択しうる社会資源や親密圏におけるジェンダー差が明らかとなった。詳細な資料については当日配布する。

精神障害者が受領するソーシャル・サポート類型の定量的検討

滋賀大学 堀兼大朗

【目的】精神障害者の対人関係は、家族に偏重しやすく、家族外の他者との関係構築には様々なハードルがあると論じられてきた。しかし実際に、精神障害者がどのような対人関係を持つのか、また、その対人関係をもたらす背景要因は何か、については十分に検討されていない。精神障害者の社会的孤立の問題を把握する意味でも、彼らの対人関係の全体像を掴む定量的な分析は重要である。そこで本研究は、精神障害者が持つ、家族外の他者や家族との関係性をソーシャル・サポートで捉え、サポート受領の類型（パターン）とその背景要因を検討する。

【方法】2019年6月に、報告者が自治体と共同で実施した、精神障害者保健福祉手帳を持つ人を対象とする質問紙調査のデータを分析に使用する。調査形式は全数調査、回収数は381、回収率は20.1%である。分析ではまず、家族外の他者（ピア、健常者、医師、福祉職員）と家族からのサポート（情緒的サポート等）の有無を表す変数を多重対応分析に投入し、次元の構築および変数同士の相互連関を示す。次に、多重対応分析で得られた個体スコアをクラスター分析にかけ、精神障害者を類型化する。最後に、類型の特徴を吟味するため、世帯形態、健康状態、被差別経験等の変数と、類型の関連性を見たクロス集計と多項ロジットの結果を示す。なお、多重対応分析には、推奨されているRパッケージのFactoMineRを用いた。

【結果】分析から、4つのクラスターを導出した。クラスター1は、家族外サポートを多く受領する傾向、クラスター2は、福祉職員以外の家族外サポートおよび家族のサポートを受領する傾向、クラスター3は、すべてのサポートを受領しない傾向、クラスター4は家族のサポートのみを受領する傾向にあった。生活状況に関して、孤立が示唆されるクラスター3のみ概説すると、単身の者が多い、健康状態が悪い、被差別経験が多い、経済的支援を受けていない傾向が確認された。

【結論】本研究では、サポートの受領を起点に、精神障害者の対人関係を4つに類型化した。また、それぞれに影響する生活状況と社会的不利についても確認した。このような研究が進展することで、サポートが乏しい層の識別が進み、ひいては精神障害者の孤立や自己責任の抑制にも寄与することが考えられる。本研究の限界の1つとして、分析では横断的データを用いているため、サポート受領と生活状況（健康状態等）との因果関係までは明らかにできていない。

※本研究は、科学研究費補助金(特別研究員奨励費:19J01153)による研究成果の一部である。

戦争の社会病理 —子どもが犠牲となること

岩手大学 麦倉 哲

1 本報告の主題と目的

本報告で「社会病理」とタイトルを付けたのは、社会を構成する人々の生命が社会的な要因により集中的に損なわれる出来事に焦点を当てるからである。数多くの人々の人生は突然に閉ざされ、また甚大なダメージを受け、社会（地域社会）も一定の期間にわたり機能不全に陥ったのである。報告者の視点は、一人ひとりの犠牲死の検証である。本報告は「生命の格差」の視点に立つ。

2 対象と方法

本報告は、15年戦争（その関連）で戦死・戦没した渡嘉敷村民および戦争体験者を研究対象とする。検証する方法は、①関係資料（渡嘉敷村、伊江村、沖縄県）調査、②渡嘉敷村関係者（主として戦争体験者、体験者の家族）への聴き取り調査、③現地でのフィールドワーク結果などを分析・総合するものである。これまでに、終戦（1945年）当時小学校学齢期以上の住民・元住民を中心に約100人の聴き取り調査を行った。

3 考察

戦争の犠牲の影響は、戦後の人口ピラミッドの形からも明らかである。しかし、戦地になったところや住民無差別攻撃を受けたところでは、ピラミッドの形が日本全般とは異なる。戦闘員となった男性の年齢階層がえぐられるような形ではない。沖縄県では、全世代の男女が犠牲となったので、ピラミッド全体が小さくやせ細った形となる。そして、終戦時に20歳未満の年齢階層の犠牲も多い。

渡嘉敷村でもこの傾向は顕著であった。終戦時の10代そして10歳未満の犠牲者が多いと言える。聴き取り調査の結果から、犠牲死が生じる場面を整理すると、A: 敵の攻撃によるもの、B: 集団自決（強制集団死、第一の玉砕場）における集団死、C: 第二の玉砕場における日米双方からの攻撃による死、D: 軍の処刑による死、E: 引揚げ途中の死などが含まれる。特に多いのはBで、次いでCである。しかし、聴き取りで判明したそれ以外の命の危機にも注目したい。集団死を生き延びた住民は、その後、日本軍と一体の行動から相対的に逃れることで、生き延びる可能性を見出した。しかし、幼少の子や乳幼児にとっては休まる状況ではなかった。村の人（男性）、泣き止まない子を黙らせようとしたからである。戦争における犠牲死は「敵との戦闘」や「軍による命令的な要因」や「虜囚の辱めを受けるな」という道徳的支配だけではなく、生きるか・生かすかを決定するうえでの上下関係の要因が作用しており、これが「生命の格差」につながっている。詳しい統計図表や事例の仔細な考察については、当日の報告で示したい。

自己和解を中心にしたリカバリー概念の生成に向けて —他者定義による「回復」を超えて—

立命館大学/三重ダルク・市川岳仁

本報告の目的は、専門家や研究者によって、近年その意味を変えられつつあるアディクション領域における「回復」という概念について、改めて当事者活動であるダルクの立場から臨床社会的に考察し、他者定義に基づかないリカバリー概念を提案することである。

依存症対策や再犯防止対策では、「立ち直り」や「回復」という言葉が頻繁に用いられるが、就労・就学・自立などのキーワードも含め、それらは社会規範に基づいた適応という意味が強く含意される強迫的で外挿性の強い回復論である。だが、本来「回復」とは、自己内対話に支えられた生の再構成としての新しい自己の創発を可能とする概念であるはずである。自己治療論 (Khantzian 2008-2013) によれば、そもそもアディクションとは、従前から抱える困難、苦痛、苦難への反作用的な、臨時的緩和化に役立つ物質、行為、そして関係性の選択であり、承認を求めて他者の期待に強迫的に応答することはアディクションの一つの様態といえるからである。

だが、筆者の編著書(準備中)の共同執筆者であるダルクスタッフ経験者たちによれば、多くの人が医療や保健福祉、再犯防止、学校教育などの場面で「当事者」として期待される役割を取り込み、それに応えようとしている。「当事者」として語ることを通して得られる承認と自己存在確認のためである。しかし、権力性のある他者から与えられるカテゴリーを内面化し、そのアイデンティティをもとに被ラベリング者自身が共同的ストーリー構築に加担することは、自己自身が抑圧主体になってしまう可能性をはらむ(佐藤, 1994)。「回復」が他者定義となってしまう。

本報告では、こうした社会から求められる「当事者らしさ」の生成過程とその外部執行性について考察することで、すでに他者定義となりつつある「回復」に代わり、自己定義によるリカバリーを提唱したい。近年のダルクの調査研究が当事者のリカバリーに与える影響についても指摘するつもりである。

基本的な問いは、リカバリーは誰が決めるのか、ナラティブの主体は誰かである。そのために、G. H. ミードの社会的自我論を援用しつつ、自己の変容に照準し、「自己和解」という概念を用いてアディクションの諸相とリカバリーの過程を考察する。

【参考文献】

- Khantzian, E. J. & Albanese, M. J. 2008, *Understanding Addiction as Self Mediation: Finding Hope Behind the Pain*, Rowman & Littlefield Publishers. = 2013 松本俊彦訳『人はなぜ依存症になるのか——自己治療としてのアディクション』星和書店
- 市川岳仁 (2022) 「自己和解を中心にしたリカバリー概念の生成に向けて —他者定義による「回復」を超えて—」 犯罪社会学研究 47:42-59
- 市川岳仁編 (準備中) 『越境者たち—学びが拓く当事者スティグマからの解放 (仮)』明石書店
- 佐藤恵 (1994) 「社会的レイベリングから自己レイベリングへ」 ソシオロギス 18:79-93

■自由報告部会Ⅱ 10:00～12:30

「男性性ジェンダーと社会関係」をテーマにして

司会 中森弘樹（立教大学）

1. 仲間入り方略に着目した男女別集合の様相
—保育園3歳児クラスのビジュアル・エスノグラフィー調査—
天野 諭（立命館大学院）
2. 若年男性の〈自己孤立化〉にかんする研究
西井開（千葉大学社会科学研究院日本学術振興会特別研究員（PD））
3. 「ひきこもり」のナラティブにみるホモソーシャルな関係
—引きこもった男性当事者の語りにみる生きづらさと共同性—
伊藤康貴（長崎県立大学）
4. 中年独身男性の社会的孤立 ——シェア居住経験者へのインタビューから
堀内翔平（京都大学大学院）

仲間入り方略に着目した男女別集合の様相 —保育園3歳児クラスのビジュアル・エスノグラフィー調査—

立命館大学人間科学研究科博士後期課程 天野 諭

本報告の目的は、保育園3歳児クラスでの参与観察と動画データをもとに、性未分化である幼児たちが遊びの中でどのように男女別集合を形成していくのか考察を試みることである。

保育におけるジェンダー研究では、幼児自身がジェンダー情報にアクセスし、それらを自らも操作・利用しながらクラス内の人間関係を構築していくことが示された（藤田 2015, 大滝 2016）。これらの研究は幼児たちのジェンダーに関する発話実践を中心に据えており、例えば「ここは女の子の場所だから男の子は入っちゃダメ」などの発話が男女別集合の形成に影響していく様相などを言い当てている。しかし、ジェンダーに関する発話実践が行われていなかったとしても、保育現場では幼児たちが男女別集合を既に始めており、どうしてこれが可能なのかを説明できていない課題が残る。

そこで本報告では、仲間入り方略に着目しながらこの課題に取り組む。仲間入り方略とは、すでに進行中である複数人が集合している遊びに対して外部から参与する幼児なりの方法のことである。そこではその保育園が有するインフォーマルな価値や規範の影響を受けつつ、進行中の遊びに関する決定権や優先権、または遊具・遊び場の利用上の規則などが幼児間で確認されている（青井 1995, 2000）。この研究では、仲間入り方略が男女別集合にどのように影響しているかという点は触れられていない。仲間入り方略の中でも幼児たちが頻繁に用いる儀礼的定型『入れてーいいよ』というやりとりに着目し、男女別集合の様相を探りたい。

儀礼的定型『入れてーいいよ』は上記のような集団遊びへの参与だけに使用されるのではなく、まず一対一の関係において使用されていた。二者間で遊びの主導権の確認が行われており、『いいよ』と許可する方が優位にある。これは遊びの最中に主導権の再確認作業としても使用されていることがわかった。そして、これは男女間でも頻繁に使用されるのだが、男女混合の複数人集合場面においてあえて同性だけに向かって使用されることが観察される。本報告ではこうした場面を取り上げ、どのような変動をもたらしていくのか考察を深めていく。

【引用文献】

- 藤田由美子（2015）『質的社会研究シリーズ8 子どものジェンダー構築-幼稚園・保育園のエスノグラフィー』ハーベスト社
- 大滝世津子（2016）『幼児の性自認-幼稚園児はどうやって性別に出会うのか-』みらい
- 青井倫子（1995）「仲間入り場面における幼児の集団調節—『みんないっしょに仲よく遊ぶ』という規範のもとで—」『子ども社会研究』Vol. 1, pp14-26
- 青井倫子（2000）「幼児の仲間入り場面における規範の機能」『幼年教育研究年報』第 22 巻, pp45-52

若年男性の〈自己孤立化〉にかんする研究

千葉大学社会科学研究院
日本学術振興会特別研究員 (PD)
西井 開

男性性にかんする社会病理として、社会的孤立の問題が長年取りざたされてきた。相対的に男性が孤立する傾向が高い要因にかんして、男性性ジェンダーの影響を示す先行研究の一群があるが、これらはあくまでマクロな統計データから分析したものであり、孤立にいたる具体的なプロセスを検討できていないという限界があった。また、その多くが成人期以降だけを対象としており、男性性と孤立の問題を包括的に捉えられているとは言い難い。

そこで、本報告では10代の時期に孤立を経験した男性のインタビュー調査をもとに、若年男性が孤立していく過程を考察する。社会関係の充実が社会資源になる現代において、孤立は男性にとって男性性を揺るがす出来事として経験される。そこで、男性性が脅威にさらされることが逸脱的な行動へとつながるという Vandello et al. (2008) の〈不安定な男性性〉を鍵概念として分析を行う。

インタビュー調査の結果、吃音や発達障害を持っているゆえに、男性同士の集団で営まれているコミュニケーション形式に乗り切れず、「ノリの悪いやつ」として煙たがられた経験が語られた。こうして居心地の悪い状況ができあがった結果、いたたまれなくなって、研究協力者たちは自ら集団から退いたという。さらに、こうして集団から疎外された男性は、進学する高校や大学に大きな望みをかけ、次こそは理想的な社会関係を構築するのだと期待していく。そうした理想の関係性には、「熱い友情」「何でも語り合える仲」など、ドミナントな男性性の反映がある。しかし、期待する男性同士の関係が築けなかった場合、男性は大きな挫折を経験する。そして、社会関係を再構築しようと努力するのではなく、周りが間違っているのだとして、周囲に冷たい態度をとったり、自ら壁をつくって関わり合わない、といった実践が語られた。

以上のように、社会的排除によって新しい社会関係に対して大きな期待が寄せられ、挫折がより大きく男性個人に降りかかること、またその結果自ら関係を断絶させてさらなる孤立に進んでいくことが示された。本報告では、研究協力者のナラティブを参照しつつ、こうした過程を〈自己孤立化〉として概念化を試みる。

【参考文献】

Vandello, Joseph A. and Bosson, Jennifer, Cohen, K. Dov., 2008, "Precarious Manhood", *Journal of Personality and Social Psychology*, 95(6) : 1325-1339.

「ひきこもり」のナラティヴにみるホモソーシャルな関係 —引きこもった男性当事者の語りにもみる生きづらさと共同性—

長崎県立大学 伊藤康貴

本報告の目的は、「ひきこもり」の当事者のナラティヴにみられる男性同士の関係性に関する語りを分析することを通じて、「ひきこもり」における男性性ジェンダーに関する生きづらさと、それにもとづく共同性を考察することである。

これまで「ひきこもり」をめぐるのは、ジェンダーに関する生きづらさがしばしば当事者から表明されてきた。男性性ジェンダーに関して言えば、たとえば引きこもった経験のある諸星ノアは、自らの経験をつづった手記の中で、自らの性体験の乏しさに触れつつ「人間として、男として、自分が圧倒的に経験値が足りないこと」への強い劣等感を告白しており（諸星 2003）、また同様に自らの引きこもった経験をもとに手記を書いた上山和樹も、自らの経験をふまえて「ひきこもり」の男性における「社会的にうまくいっていない自分のような人間に、異性とつきあう資格などない」という性的な挫折感情を、社会的・経済的挫折と並ぶ「ひきこもり」における重要な論点として提起している（上山 2001）。報告者自身も引きこもった経験を持つが（伊藤 2022）、「ひきこもり」をめぐる男性性ジェンダーに関する生きづらさについて自らの経験を記述したことがあり（伊藤 2011）、その後、E・セジウィックや上野千鶴子による議論を参照しつつ、引きこもった男性が語るホモソーシャルな関係における「男に値しない男」（男性集団から承認なされない男性）への嫌悪について考察を行ってきた（伊藤 2016）。

本報告においては、先行する議論をふまえつつ、報告者が行ったインタビューデータや報告者自身の自分史（伊藤 2011, 2022）、これまで刊行されてきた当事者による手記（諸星 2003, 上山 2001 など）における男性間の関係に関する語りを分析し、当事者の経験がどのように男性性ジェンダーと結びつけられて語られているのかを検討する。そのことを通じて、「ひきこもり」の男性当事者が語る男性性ジェンダーに関する生きづらさそれ自体を考察すると同時に、男性参加者がほとんどを占める「ひきこもり」の当事者グループにおいては、自らの生きづらさを男性性ジェンダーと関連づけて語ることによって自らの当事者性が正当化され、かつ引きこもった男性当事者間の関係性が維持されていることを示す。

【文献】

- 伊藤康貴, 2011, 『「ひきこもり」の当事者たちのセクシュアルな語り——『ひきこもり』の自分史・補遺』『KG/GP 社会学批評別冊共同研究成果論集』: 245-56.
- 伊藤康貴, 2016, 『「ひきこもり」と親密な関係——生きづらさの語りにもみる性規範』『社会学評論』66(4): 480-97.
- 伊藤康貴, 2022, 『「ひきこもり当事者」の社会学——当事者研究×生きづらさ×当事者活動』晃洋書房.
- 諸星ノア, 2003, 『ひきこもりセキララ』草思社.
- 上山和樹, 2001, 『「ひきこもり」だった僕から』講談社.

中年独身男性の社会的孤立——シェア居住経験者へのインタビューから（男性性ジェンダーと社会関係）

京都大学大学院 堀内翔平

ライフコースが個人化した現代においては、個人と全体を媒介する中間集団（家族、地域集団、職場集団など）から個人が解き放たれ、人間関係を自由な選択によって形成・維持することになるため、相手を満足させる資源の乏しい者が関係を形成・維持できない「関係の格差」が生じてしまい、孤立問題が前景化する。家族主義の強い（大沢 2007）日本においては、とりわけ男性が配偶者サポートにのみ依存しがちである（石田 2011）。しかし、非婚化によって40代50代の中年単身世帯が急激に増加しているため、孤立問題は中年未婚者に広がっている（藤森 2019）。そこで、日本では欧米と違い、親密性が個人の選択によっては追求されにくく、共同性に深く埋め込まれているという指摘（野口 2018）をふまえ、婚姻・血縁に基づかない共同生活である「シェア居住」において、中年独身男性の社会的孤立の問題が解決される可能性について検討する。

広い意味での社会的孤立の解決をシェア居住に見出す先行研究は、福祉の対象として可視化されているひとり親や高齢者を対象としたもの（小谷部 2004 など）と、今後結婚する可能性の高い若年者（30代半ば以下）を対象としたもの（司馬ほか 2019 など）とに二極化してしまっており、結婚がなされなくなっていく中年期のシェア居住には焦点が当てられていない。よって、中年独身男性のシェア居住経験に焦点を当てることで、家族主義の強い日本における社会的孤立の困難とその解決策についての知見を得ることを目的とする。

方法としては半構造化インタビューを用い、35歳から59歳の方を対象に、シェア居住に至るまでのライフコースと対人関係、シェア居住における生活と対人関係、現在シェア居住をしていない場合はその後の変化について聞き取った。その結果、シェア居住が親密性を供給したり、ライフコースの中断地点として機能したりする場合もあるが、その成否を規定するものとして、住人の異質性に対してどのように対処するかが重要なポイントとなっていることが分析された。報告当日は詳しくデータを紹介し、シェア居住の経験から見出される中年独身男性の孤立の様相について考察する。

【文献】

- 藤森克彦、2019、「中年層の単身世帯が抱える生活上のリスクと求められる対策」『家族社会学研究』31(2)：172-89。
- 石田光規、2011、『孤立の社会学』勁草書房。
- 小谷部育子、2004、『コレクティブハウジングで暮らそう』丸善。
- 野口裕二、2018、『ナラティブと共同性』青土社。
- 大沢真理、2007、『現代日本の生活保障システム』岩波書店。
- 司馬麻未・三好庸隆・木多道宏、2019、「シェア居住における共用空間が社会環境形成に与える影響」『日本建築学会計画系論文集』84(762)：1657-67。

■シンポジウム（13:15～16:00）

「現代家族研究の争点と社会病理学 ―家族を透視する―」

今期の研究委員会は社会病理学研究と学会の活性化をめざし、①社会病理学研究のすそ野を広げていくこと、②関連する社会学分野との対話を促進すること、③社会病理学研究の若手層を拡大していくことを念頭においてシンポジウム、ラウンドテーブルを組織してきました。社会病理的現象がたくさん生起している現代社会をさまざまな角度から把握し、社会病理学研究や学会の活性化につなげる努力を試みてきました。シンポジウムは、社会病理学における地域・都市研究の広がりや深まり（2020年度）、教育をめぐる社会病理（2021年度）をテーマに組織しました。

2022年度は家族研究と社会病理学の交差を軸に企画を進めています。現代家族の争点と社会病理学研究について、臨床家族研究・家族ソーシャルワークや家族心理学、家族を争点とした社会と国家の政策形成や制度構築の解説と動態、そうした事象への家族社会学研究の知見に学ぶこと、そしてそれらを社会病理学研究としてどうひきとっていくのかなどを話題にしたいと考えています。とくに社会的課題となっている諸課題（社会的養育、再犯防止・離脱の課題、脱スティグマなど）に焦点をあて、「問題としての家族」と「家族的なるものへの期待と負荷」の双方から方舟のように漂う現代家族の様相を照射してみたいと思います。

企画・進行 中村正（立命館大学）

「受刑者の語りから考える社会復帰と家族」

下郷大輔（作新学院大学）

罪を犯した人の帰住先に家族が重視されている。刑務所での改善指導に生育歴への省察が組み込まれ自己洞察の促進と犯罪への責任を自覚するために取り組まれている心理教育の組み立てが前景化する。しかし現実には厳しい。矯正教育のなかで家族をどう位置付けるべきなのか。なかには生育歴からすると家族への恨みを持つこともある。これはジレンマである。更生や保護のなかで家族をいかに扱うのか、この実践の経過と理論や課題を探る。映画「プリズンサークル」（坂上香監督）で心理士として登場している。14年間、島根あさひ社会復帰促進センターで心理教育を担当してきた経験をもとに報告する。

「矯正施設におけるグループワークの中で家族について語ることの意味」『家族療法研究』34(3) 49-56、2017、「養育者としての男性」『父親の役割とは何か』（共著）ミネルヴァ書房、2021年。

「迷宮を生きる自己と脱家族—加害者家族研究をもとに」

宮崎（高橋）康史（日本福祉大学）

本報告では、家族に犯罪者／加害者をもつ人びとがスティグマをどのように経験していくのかを論じた『増補版 ダブル・ライフを生きる〈私〉——脱家族化の臨床社会学』の執筆過程で報告者自身の生活世界で生じていったアイデンティティの変化について内省的な考察をした後に、同書で論じることができなかつた、家族というフレームに対して、家族に加害者をもつ人びとがいかにして抜け出していくことができるのかについて議論していく。具体的には、特定非営利活動法人非行克服支援センターが出版した非行と家族に関する調査研究をもとに、研究という営みそれ自体のリフレクティブな分析を試みる。

高橋康史、2021、『増補版 ダブル・ライフを生きる〈私〉——脱家族化の臨床社会学』晃洋書房。宮崎康史、2022、「若者の〈非-主体的な暴力〉に関する社会学的試論——存在証明パンデミックとしてのコロナ禍社会」、『社会と倫理』第37号、印刷中。

「政策における家族主義」

藤間公太（国立社会保障・人口問題研究所）

今日の日本社会では、福祉、教育、司法など、さまざまな領域をめぐる政策において、家族に多くの役割が期待されている。一方で、現実には全ての人々が「頼れる家族」を持つわけでは必ずしもない。こうしたなかで特定の家族のあり方のみを前提として種々の政策が整備されることは、人々が経験する困難を解決しないばかりか、それをより深刻化させる危険も孕んでいる。本報告では、こうした事態を〈家族主義〉の問題と捉えたうえで、人々のニーズ充足機能の脱家族化に向けて議論を展開したい。

主要業績として、『児童相談所の役割と課題——ケース記録から読み解く支援・連携・協働』（東京大学出版会、2020年、共編著）、『代替養育の社会学——施設養護から〈脱家族化〉を問う』（晃洋書房、2017年、単著）がある。

指定討論者

三浦恵子（法務省東京保護観察所）

大卒業後更生保護官署職員（保護観察官）として各地で長年再犯防止の実務に従事。少年矯正や医療観察分野での実務経験あり。入職とほぼ同時に薬物依存症当事者・家族の回復支援のボランティアに参加。社会福祉士、認定精神保健福祉士、家族療法学会等に所属。『月間福祉』（全社協）2022年5月号「特集：子どもを中心においた支援を実現するために」に「〈非行のある少年〉の社会復帰を支援する」を執筆。

岡邊健（京都大学）

京都大学大学院教育学研究科教授。犯罪や少年非行について、社会学的観点から研究している。近年は、①非行からのレジスタンスのプロセスに関する研究、②非行の原因・要因に関する国際比較を含む研究、③一般市民の法意識に関する研究などに従事している。主要業績として、『犯罪・非行からの離脱』（ちとせプレス、2021年、編著）、『犯罪・非行の社会学〔補訂版〕』（有斐閣、2020年、編著）がある。

会場案内

○大会校からのお知らせ

- (1)すべての教室にはPC、マイク、プロジェクターなどが設置されております。PC利用者はUSBメモリ等の外部メモリを持参していただければ、Microsoft PowerPoint 2019やAdobe Acrobat Readerをご利用いただくことができます。機器を持ち込まれる場合には、HDMI端子に対応しているものを各自でご用意ください。
- (2)会場はeduroamをはじめ、学外の方が自由にアクセスできるインターネット環境をご準備することができません。ご自身で機器を持ち込まれる場合には、その点ご注意ください。
- (3)会場の近隣にはコンビニエンスストアや飲食店がなく、学内のコンビニエンスストアや食堂も当日は営業しておりません。各自でご準備いただくか、2日目に関しては申込時に弁当（飲み物を含めて1,200円）を忘れずご注文いただくなど、お願い申し上げます。
- (4)今回の大会では、上記昼食弁当の準備や、新型コロナウイルス感染症対策のために受付業務を最小限にするため、ご参加にあたり、**事前申込・事前決済**をお願いしております。**10月31日（月）を期限に**、忘れずに下記からお申し込みをいただくよう、お願い申し上げます。なお、受付では大会参加費と昼食費を分けた領収書をお渡しする予定です（個人名印刷済・公印省略）。

「こくちーざプロ」日本社会病理学会第38回大会申込ページ

<https://onl.sc/TYb2x8w>



- (5)会場へお越しの際、自家用車のご利用は固くご遠慮しております。公共交通機関（北陸鉄道バス）やタクシー等をご利用ください。北陸鉄道バスの金沢駅および香林坊から北陸学院大学までの片道運賃は380円、運賃後払いで、北陸鉄道バス専用のもの以外に、交通系ICカードをご利用いただくことはできません。

○会場へのアクセス

ACCESS



バスの場合

JR金沢駅兼六園口バスターミナル10番のりばより北陸学院大学行（路線番号21）乗車、約30分。北陸学院大学前下車、徒歩3分

JR金沢駅⇄平和町の間は、10～15分間隔で北鉄バスが運行されています。平和町で下車、平和町公園横よりスクールバスを利用すると、さらに便利に通学できます。



※土曜日・日曜日はバスの本数が少なくなっております。次頁にてダイヤをご確認の上、ご参加ください。

○北陸鉄道バス時刻表（土日祝）

◆金沢駅→北陸学院大学

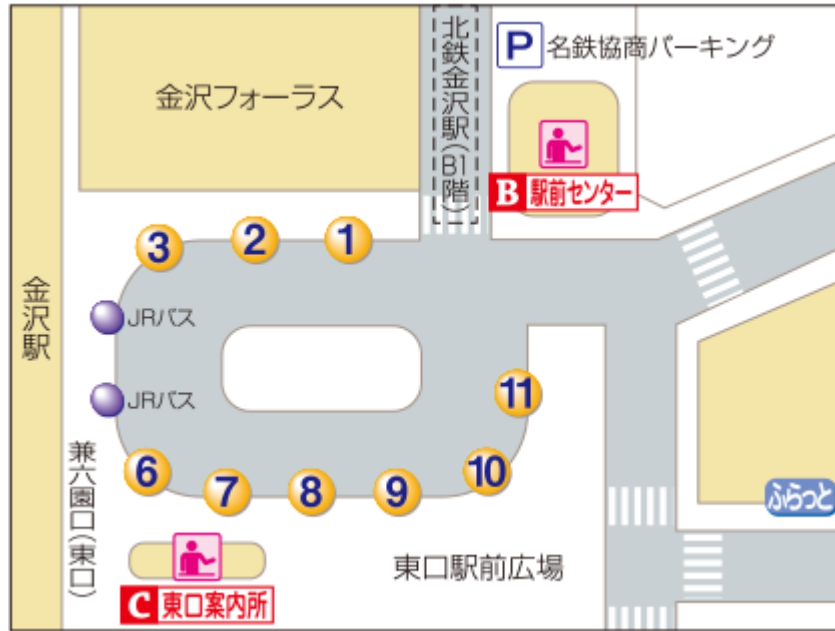
改正日：2022年04月01日
 (20/21/22/25) 平和町、野田、大桑

曜日：土日祝 方向：1

コメント	金沢駅	武蔵ヶ辻	香林坊	広小路	寺町三丁	寺町二丁	寺町一丁	十一屋	平和町	金附自衛	野田	野田東	大桑	大桑グラ	大桑住宅	大桑タウ	自由が丘	つつじ丘	つつじ丘	万寿苑前	三小生	北陸学院	別所	別所南	内川小学				
	648	652	656	701	703	704	705	706	708	709	710	711					712	716											
	704	708	712	717	719	720	721	722	724	725	726		728	729	734														
	719	723	727	732	734	735	736	737	739	740	741	742					743		744	745	747	754							
	734	738	742	747	749	750	751	752	754	755	756		758	759	804														
	744	750	754	759	801	802	803	804	808	809	810	811							812		813	814	816	817	819	821	824		
土曜のみ、運行	754	758	802	807	809	810	811	812	819																				
	809	813	817	822	824	825	826	827	829	830	831		833	834	839														
	829	833	837	842	844	845	846	847	849	850	851	852					853	859											
	849	853	857	902	904	905	906	907	909	910	911	912							913		914	915	917	924					
	909	913	917	922	924	925	926	927	929	930	931		933	934	939														
	929	933	937	942	944	945	946	947	949	950	951	952					953	959											
	949	955	959	1004	1006	1007	1008	1009	1013	1014	1015	1016					1017		1018	1019	1021	1027							
	1009	1015	1019	1024	1026	1027	1028	1029	1033	1034	1035		1037		1038	1043													
	1029	1035	1039	1044	1046	1047	1048	1049	1053	1054	1055	1056							1057	1102									
	1049	1055	1059	1104	1106	1107	1108	1109	1113	1114	1115	1116							1117		1118	1119	1121	1127					
	1109	1115	1119	1124	1126	1127	1128	1129	1133	1134	1135		1137		1138	1143													
	1129	1135	1139	1144	1146	1147	1148	1149	1153	1154	1155	1156					1157	1202											
	1139	1145	1149	1154	1156	1157	1158	1159	1207																				
	1149	1155	1159	1204	1206	1207	1208	1209	1213	1214	1215	1216					1217		1218	1219	1221	1227							
土曜のみ、運行	1159	1206	1209	1214	1216	1217	1218	1219	1227																				
	1209	1215	1219	1224	1226	1227	1228	1229	1233	1234	1235		1237		1238	1243			1257		1258	1259	1301	1302	1304	1306	1312		
	1229	1235	1239	1244	1246	1247	1248	1249	1253	1254	1255	1256																	
	1249	1255	1259	1304	1306	1307	1308	1309	1317																				
	1309	1315	1319	1324	1326	1327	1328	1329	1333	1334	1335		1337		1338	1343													
	1329	1335	1339	1344	1346	1347	1348	1349	1353	1354	1355	1356							1357	1402									
	1349	1355	1359	1404	1406	1407	1408	1409	1413	1414	1415	1416							1417		1418	1419	1421	1427					
	1409	1415	1419	1424	1426	1427	1428	1429	1433	1434	1435		1437		1438	1443													
	1429	1435	1439	1444	1446	1447	1448	1449	1453	1454	1455	1456					1457	1502											
	1449	1455	1459	1504	1506	1507	1508	1509	1513	1514	1515	1516							1517		1518	1519	1521	1527					
	1509	1515	1519	1524	1526	1527	1528	1529	1533	1534	1535		1537		1538	1545													
	1529	1535	1539	1544	1546	1547	1548	1549	1553	1554	1555	1556							1557	1604									
	1549	1555	1559	1604	1606	1607	1608	1609	1613	1614	1615	1616					1617		1618	1619	1621	1629							
	1609	1615	1619	1624	1626	1627	1628	1629	1633	1634	1635		1637	1638	1644														
	1629	1635	1639	1644	1646	1647	1648	1649	1653	1654	1655	1656							1657	1704									
	1649	1655	1659	1704	1706	1707	1708	1709	1713	1714	1715	1716							1717		1718	1719	1721	1729					
	1709	1715	1719	1724	1726	1727	1728	1729	1733	1734	1735		1737	1738	1744														
	1729	1735	1739	1744	1746	1747	1748	1749	1753	1754	1755	1756					1757	1804											
	1749	1755	1759	1804	1806	1807	1808	1809	1813	1814	1815	1816							1817		1818	1819	1821	1829					
	1809	1813	1817	1822	1824	1825	1826	1827	1829	1830	1831		1833	1834	1839														
	1829	1833	1837	1842	1844	1845	1846	1847	1849	1850	1851	1852							1853	1859									
	1849	1853	1857	1902	1904	1905	1906	1907	1909	1910	1911	1912							1913		1914	1915	1917	1924					
	1909	1913	1917	1922	1924	1925	1926	1927	1929	1930	1931		1933	1934	1939														
	1929	1933	1937	1942	1944	1945	1946	1947	1949	1950	1951	1952							1953	1959									
	1949	1953	1957	2002	2004	2005	2006	2007	2009	2010	2011		2013	2014	2019														
	2014	2018	2022	2027	2029	2030	2031	2032	2034	2035	2036	2037							2038		2039	2040	2042	2046					
	2044	2048	2052	2057	2059	2100	2101	2102	2106																				
	2114	2118	2122	2127	2129	2130	2131	2132	2136																				
	2144	2148	2152	2157	2159	2200	2201	2202	2206																				
	2214	2218	2222	2227	2229	2230	2231	2232	2236																				

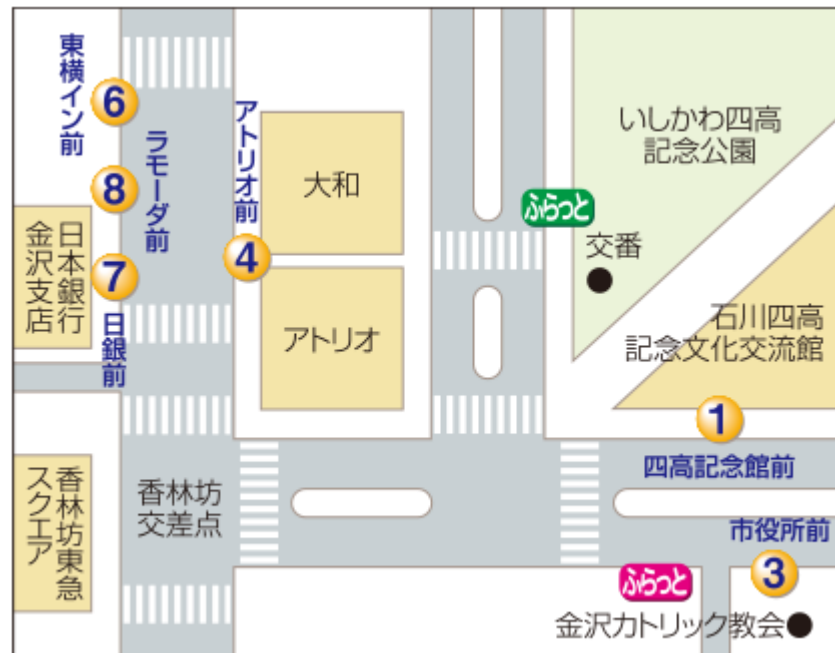
金沢駅	香林坊	北陸学院大学
7時19分	7時27分	7時54分
7時44分	7時54分	8時17分
8時49分	8時57分	9時24分
9時49分	10時04分	10時27分
10時49分	10時59分	11時27分
11時49分	11時59分	12時27分
12時29分	12時39分	13時02分
13時49分	13時59分	14時27分
14時49分	14時59分	15時27分
15時49分	15時59分	16時29分
16時49分	16時59分	17時29分
17時49分	17時59分	18時29分
18時49分	18時57分	19時24分
20時14分	20時22分	20時46分

◆金沢駅東口バスのりば



10 ■香林坊 広小路経由
 20 平和町 金大附属学校自衛隊前 22 大桑住宅 大桑タウン
 21 つつじが丘住宅 北陸学院大学 25 内川小学校前 26 泉野出町

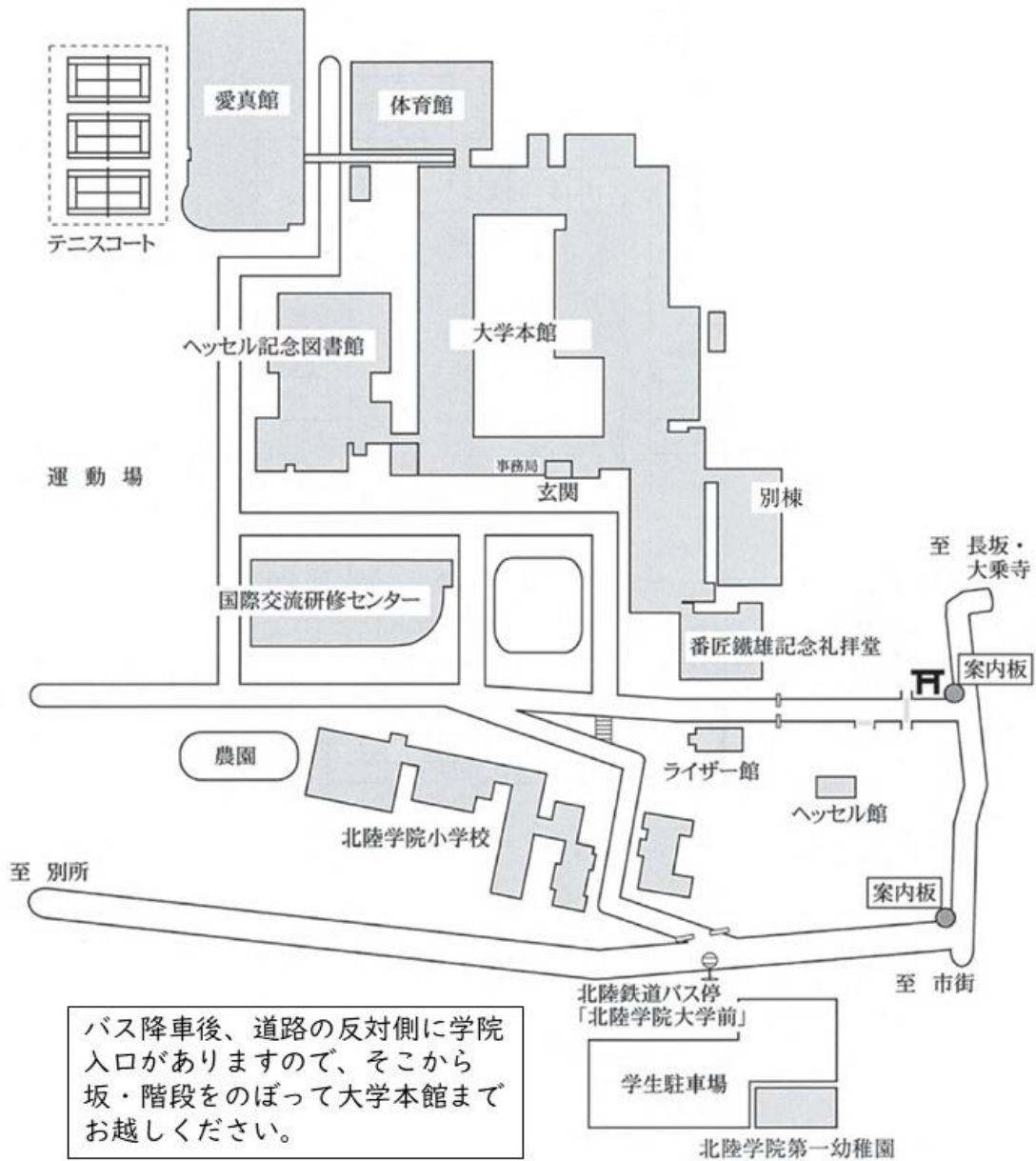
◆香林坊バスのりば



4
 21 つつじが丘住宅 北陸学院大学 25 内川小学校前 26 泉野出町
 30 光が丘住宅 石川県立大学 30 33 鶴寿園 31 額住宅 下森島

◆会場案内

北陸学院三小牛キャンパス案内図



校舎案内 INFORMATION

1階



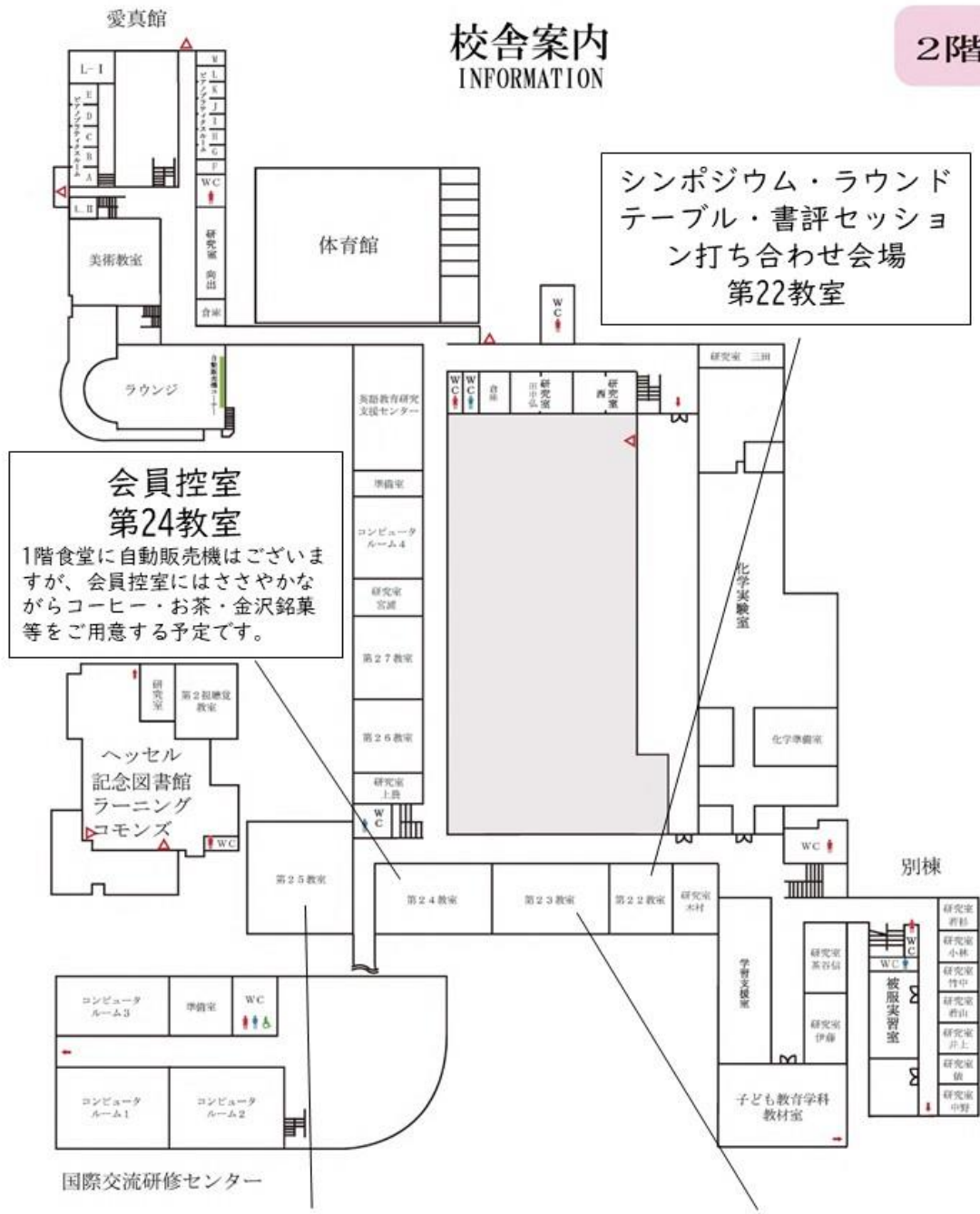
当日は食堂の営業はございませんが、食事・休憩等にご利用ください。自動販売機は設置されております。

玄関を入ったところに受付を設置する予定です。

凡例	
	通路口
	設備はしこ

校舎案内 INFORMATION

2階



メイン会場
第25教室

理事会会場・理事控室
第23教室



愛真館



校舎案内 INFORMATION

3階



国際交流研修センター

自由報告部会会場
第34教室

参加状況により、使用教室が変更になる場合がございます。悪しからずご了承ください。

